

沙港日本国語学校初の 初等科用日本語教科書に関する一考察

船 越 亮 佑*

1. 問題の所在

沙港日本国語学校（現シアトル日本語学校）は、1902（明治35）年に日本人会の附属小学校として米国のワシントン州シアトルで設立された。これは日本郵船のシアトル航路開設により本格的に移民のはじまった1896（明治29）年から6年後のことであった。この学校は、米国本土において最も早く設立された日本語学校である。明治初年より移民のはじまったハワイにおいて、1915（大正4）年に日本語学校の統一機関として発足した布哇教育会よりも、10年以上も早い設立であった。だが、そこで独自に編纂された教科書の発行は、1917（大正6）年に刊行された布哇教育会初の日本語教科書より3年遅い、1920（大正9）年にはじまった。当時、シアトルの小学校に通学する日系人子弟は、男子489名、女子317名の計806名であった。小学生の全数が41809名であったので、全体の2%近くが日系人子弟であった¹⁾。

1920年代のワシントン州は、明治の初期から移民により移り住んでいた日系人にとって激動の時代であった。1921（大正10）年、ワシントン州はカリフォルニア州が前年に成立させた土地法をもとに、移民の土地や財産の所有を禁じる「外国人土地法」を採用した。この動きは、1910年代にはじまった排日運動の流れをくむものであった。そして、1924（大正13）年には帰化不能外国人の米国への移住を禁じる移民法が成立し、すでに帰化不能外国人であることが最高裁の判決により決定していた日本人は、自動的に移民としての入国が不可能になった。これにより、一時帰国していた移民が米国に

再入国できず、家族が離散するという事態も生じた²⁾。

沙港日本国語学校初の初等科用日本語教科書は、こうした時期に編纂されたものである。復刻版『シアトル版日本語読本』（文生書院、2012年）を編纂したエドワード・マック（Edward Mack）は、この教科書とそれに続く1929（昭和4）年から発行されたシアトルの日本語教科書の意義について、解題のなかで次のように述べている（山崎信子訳）。

この教科書によって国語は国民国家という枠組みを超え、帝国、準植民地、そしてディアスポラ的なコミュニティにまで届く、より大きな教育的過程を表象している。換言すれば「国語」が「日本語」になる過程と言えるだろう。単一民族国家と思われた内部では、言語・国家・民族の関係は自明と思われていたかもしれないが、「国語」教育がいったん国民国家の外にでるやいなや、それまで可視化されていなかった（原文：less pronounced, or at least less visible）言語・国家・民族の間の亀裂が明らかになるということである。³⁾

正確にいうならば、ここには植民地の「国語」教育の問題を加味する必要がある。戦前・戦中に日本の植民地であった台湾・朝鮮・南洋群島などで使用された「国語」教科書をみれば、他民族の国家である外部を、単一民族国家に組み込もうとする教育が行われていたことがわかる。可視化はしていたが、直視はしていなかったというのがより正確ないい方であろう。ともあれ、沙港日本国語学校初の初等科用日本語教科書とそれに続く教科書の刊行を「国語」が「日本語」になる過程を表象する

* ふなこし りょうすけ 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所 言語文化系教育講座
キーワード：日本語／国語／移民／植民

とするマックの見解には、筆者は同意する。

また、「国語」と「日本語」をめぐっては、以下のよう
な見解も示されている。これは、安田敏朗が『脱「日
本語」への視座』(三元社、2003年)のなかで述べたも
のである。

「日本語」という体制の成立は、多言語性とむきあ
いのなかで生じた。時代的にいえば、「国語」とい
う体制の成立を西暦一九〇〇年をはさむ時期、国民
国家としての日本の完成の時期であるとするならば、
「日本語」という体制の成立は、ややおくれで一九三
〇代前半、「満洲国」を成立させて「国語」という
体制以外の手法で異言語支配をおこなっていくよう
になった、帝国としての日本が実体化する時期とい
える。⁴⁾

安田は、小学校令改正による「国語科」の設置や、文
部省国語調査委員会の発足、そして第一期国定国語教
科書の編纂が動き出した1900(明治33)年頃に「国語」
という体制が成立し、1932(昭和7)年中国東北部に日
本主導のもと建国された「満洲国」において行われた教
育を皮切りに「日本語」という体制が成立したとする。
「国語」体制の成立を1900年頃、「日本語」体制の成立
を1930年代とする安田の見解に筆者は同意する。付言
すれば、1900年頃は台湾総督府編纂の第一期「国語」
教科書が刊行された時期でもあるため、帝国日本の「国
語」体制という意味でもその見解は有効性をもつ。

この両者の見解をふまえると、沙港日本国語学校初の
初等科用日本語教科書が刊行された1920(大正9)年頃
は、1900年頃の「国語」体制から1930年代の「日本語」
体制になる過程の只中であつたといえる。帝国日本の膨
張とともに、内地(本稿では北海道・本州・四国・九
州・沖縄を指す)や外地(本稿では植民地・占領地・委
任統治領・租借地などを指す)において「国語」体制か
ら「日本語」体制への移行があつたかわらで、移民地
においても日本語を教育する制度があつた。そして、
その制度は、ただ移民地に限定される問題として存す
るのではなく、内地や外地までも含み込む問題の系統と
して存すると考えるべきである。

近年、戦前・戦中の国語及び日本語教科書に関する研
究が盛んに行われている。そこでは、内地で使用された
国語教科書はもちろん、外地で使用された「国語」教科

書についても検討されている。たとえば、日本植民地教
育史研究会が2009(平成21)年に皓星社から出した『植
民地教科書と国定教科書』は、上田崇仁の「朝鮮総督府
『国語読本』と国定『国語読本』の比較——挿絵のみに
見られる特徴」や、蔡錦堂の「戦時期台湾の公学校国語
教科書と日本の国定国語教科書との比較」などの論考を
載せている。いうならば、対象を日本本土に限定する国
語教科書史を本土以外で使用されたものも対象として包
含する「国語」教科書史として捉える動きが生じはじめ
ている⁵⁾。

だが、そうした従来の比較研究では、内地と外地の教
科書が取り上げられるにとどまり、研究の視角及び視座
がその二項に限定されていた。したがって、戦前・戦中
の国語及び日本語教科書について、より広くすなわち移
民地の教科書を含めた包括的な視点をもって研究するこ
とは行われていない。本稿が結論として導くことになる
が、移民地の教科書は、内地の教科書だけでなく植民地
の教科書とも密接な結び付きをもっている。

本研究の目的は、沙港日本国語学校初の初等科用日本
語教科書について、他の地域で使用された教科書との比
較を通し、採録教材の転用のありようと教科書の性格
を、明らかにすることである。

2. 教科書の編纂経緯

1902(明治35)年の学校設立から6年後の1908(明
治41)年6月4日、児童教育相談会が開かれた。小学
教育主任教師坪田琢磨の感想によれば、当時の日本国語
学校は次のような状態であつた⁶⁾。

全校児童及び生徒は27名で、学級は4つに分かれて
いた。授業時間は2時間であつたが、公立小学校の放課
後に行われたため、日系人子弟たちは精神も意気も非常
に疲労しており、集中力を保ったまま勉学に励むことが
難しかった。日本の小学校に在学経験のある子弟は成績
が優等であるが、ハワイから来た者や米国本土で育つた
者は成績が芳しくなかつた。

これを受けて、相談会への出席を求められていた日本
領事官の田中都吉が演説を行った。その内容をスコッ
ト・エドワード・ハリソン(Scott Edward Harrison)は、
次のようにまとめている(森田まき訳)。

田中領事官は教育課程の内容こそ合衆国における日本語教育の最重要側面となるとみなした。彼は、アメリカ市民になることのできない日本生まれの子供たちを持つ多くの親たちの心配を知り、だからこそ彼等の子供達に完全な日本の教育を与えることで子供達がいつの日か日本に戻れるよう望んだ。田中領事官は過半数の子供達はもはや「完全な日本人」ではなく、彼等に包括的な日本の教育を施そうとする試みは現実的でないことに気付いた（後略）。⁷⁾

田中の演説は、会場の人々に深甚の感を与えた。そして、10の趣旨に基づく教育機関を新設することが決められたが、その4つ目は、「成る丈け面白く且つ愉快に日本思想を鼓吹し、何時の間にやら国家的精神を涵養せしむる事」であった⁸⁾。「包括的な日本の教育」を施すことが現実的でなかったために、「何時の間にやら国家的精神を涵養」させる方向へ教育の方針が変えられたのである。

5年後の1913（大正2）年、それまで教室として使用する建物を転々としてきた日本国語学校は、小村寿太郎や伏見宮貞愛親王などからの寄付金をもとに新校舎を設立した。当時の生徒数は98名にまで増えていた⁹⁾。

先述したとおり、この時期の米国では排日運動が盛んになってきていた。そこで、1919（大正8）年に西北部連絡日本人会は、教育調査委員会を設置することを決め、排日運動の火種の一つとなっている日本語学校に対する誤解を解くため、国定教科書を使用するのではなく独自の教科書を編纂して使用するよう各地域へ通達した。

これに応じた沙港日本国語学校は、学校長を務めていた高島虎太郎を中心に『日本語読本』全8巻を編纂することとなった。高島は、1911（明治44）年に行われた父兄会において、「在留児童の普通教育は日本主義、米国主義といはずして単に善良なる個人を養成するといふに重きを置く事を最良とす」という沙港日本国語学校の教育方針を表明していた¹⁰⁾。日本人会は高島に旅費として1000ドルを支出し、教科書編纂に対する礼金として700ドルを贈った。その旅費とは、日本への派遣であった¹¹⁾。

1920（大正9）年、米国議会下院の移民調査委員の実地視察の際、学校が高島の編纂した日本語教科書の原稿を提供し、「在留日本人が其の米国出生児童の日本語教育に最善の注意をなし、米化主義と相反せざる新読本の出版に着手したれば其の内容の一覧を請ふ旨申し出でたところ、一行は久しく誤解の裡にあつた日本国語学校の真相を了解したることを諒とした」という¹²⁾。

だが、以下の分析により明らかになるが、そこでは先述した「何時の間にやら国家的精神を涵養」させる方向性が完全に失われていたわけではなかった。

3. 分析の方法

分析は、沙港日本国語学校初の初等科用日本語教科書に加えて、それより早く発行された以下の尋常科及び初等科用の国語及び日本語教科書を用いて行う¹³⁾。[表1、表2、表3]

表1 内地で使用された教科書¹⁴⁾

	文部省・第一期	文部省・第二期	文部省・第三期
教科書	尋常小学読本	尋常小学読本	尋常小学 国語読本
初版発行年	1903-1904	1909-1910	1917-1923

表2 米国で使用された教科書¹⁵⁾

	布哇教育会初	沙港日本国語学校初
教科書	日本語読本 尋常科用	日本語読本
初版発行年	1917	1920-1921

表3 外地で使用された教科書¹⁶⁾

	台湾総督府・第一期	台湾総督府・第二期	朝鮮総督府・第一期
教科書	台湾教科用書 国民読本	公学校用 国民読本	普通学校 国語読本
初版発行年	1901-1903	1913-1914	1912-1915

沙港日本国語学校初の日本語教科書より早く発行された外地の教科書には、他にも満鉄附属地で使用された奉天外国語学校の『日本語読本』(1917年)¹⁷⁾や、南洋群島の第一次「国語」教科書である『国語読本』(1917・1919年)があるものの、それらは一部が未発見の資料となっているため、今回は考察の対象としない。

まずは、沙港日本国語学校初の日本語教科書(以下、沙港初読本)について、巻1の考察から全体の見通しを立てる。そこで比較の対象とするのは、国定国語教科書(以下、国定読本)とりわけ第二期国定国語教科書(以下、国Ⅱ読本)と、布哇教育会初の日本語教科書(以下、布会初読本)である。なぜなら、沙港初読本は、他の教科書に比して国Ⅱ読本及び布会初読本と圧倒的に多くの教材が共通しているからである。次いで、国定読本及び布会初読本との比較を中心に、巻2から巻8の各巻について検討する。そこでは、巻ごとに国定読本及び布会初読本との共通教材のありようを図で示し特筆すべき事項を取り上げて考察を行う。そして最後に、全巻を通じた考察を、分野別の共通教材採録数と外地で使用された植民地の教科書——台湾総督府編纂の第一期・第二期の「国語」教科書(以下、台湾読本)と、朝鮮総督府編纂の第一期「国語」教科書(以下、朝Ⅰ読本)——からの影響に焦点をあて行い、沙港初読本の性格を明らかにする。

4. 巻1の考察と全体の見通し

沙港初読本の巻1は70課の教材が採録されている。だが、他の巻と違って課名がなく、通し番号だけが付されている。たとえば、巻1の第1課と第2課は、各々「メ。」「ミミ。」と書かれている下に、目と耳の挿絵が描かれている教材である。これらは、布会初読本においても、同じく巻1に文字のない挿絵だけの教材として載せられている。

この巻で注目されるのは国旗の挿絵である。以下に示したのは、左から、国Ⅱ読本の巻1、布会初読本の巻1、沙港初読本の巻1に採録された国旗を用いた教材である。[写真1、写真2、写真3]

みてわかるように、内地で使用された国Ⅱ読本においては日本国旗の掲げられた挿絵が載せられ、またハワイで使用された布会初読本においては日本国旗と米国旗の掲げられた挿絵が載せられている。そして、米国本土のシアトルで使用された沙港初読本においては、米国旗の掲げられた挿絵が載せられている。

ここには、教科書ごとの、日本の国民教育と米国の市民教育に対する傾注の度合いが象徴的に示されているのではなかろうか。すなわち、国定読本は日本の国民教育を、沙港初読本は米国の市民教育を志向し、布会初読本は二つの志向性の中で揺れていると考えられる。以下では、この見通しの検証をはかりながら論を進めていく。

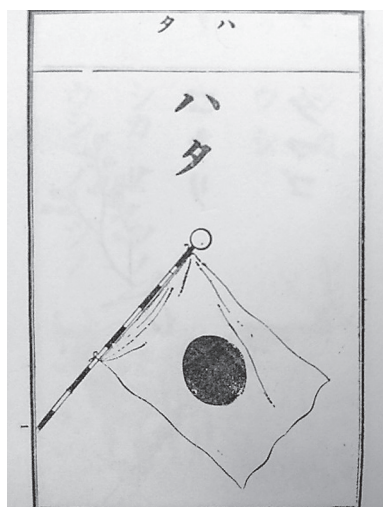


写真1

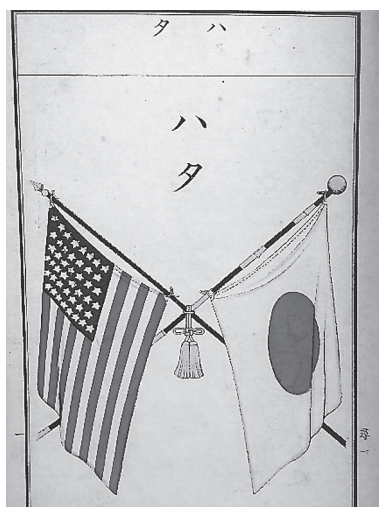


写真2

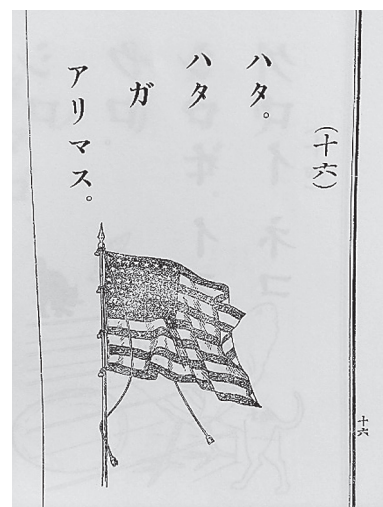


写真3

5. 各巻の検討——国定教科書とハワイの教科書からの影響

巻1の考察により得られた全体の見直しをもとに、巻2から巻8の考察を行っていく。各巻検討のなかの図には、当該巻における採録教材の課名を示している。集合で示した部分は、左が国定読本との共通教材で、右が布会初読本との共通教材である。重なり部分に示した教材は、国定読本と布会初読本のいずれとも共通する教材である。ここでいう共通教材とは、先行する教科書から転用された教材、あるいはそこから着想を得て作成されたと考えられる教材を指す。教材は、哲学、歴史、地理、海・山、公民・社会、学校、家庭、伝説・昔話、風俗、軍事、科学、植物、動物、天体、季節・方角、気象、災害、衛生、産業、交通、新聞・通信、芸術、言語・文学、遊び、雑の25分野に分類し、それを課名の後に略記した¹⁸⁾。また、下線を引いた課名は考察のなかで言及する教材であることを示す。なお、本文を引用するにあたって、旧字体の漢字は新字体に改めた。

〈巻2の考察〉

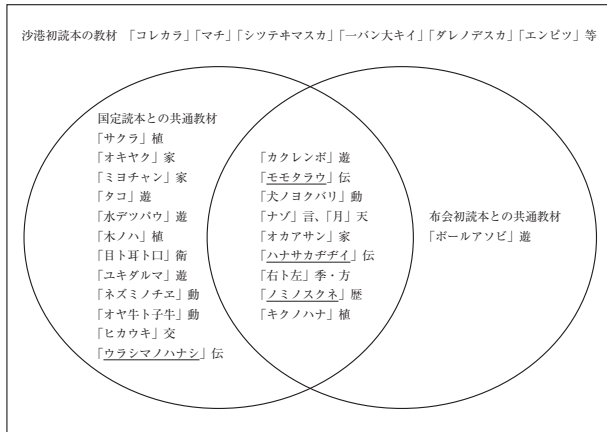


図1

沙港初読本の巻2は45課の教材が採録されている(複数課に分かれている教材は合わせて1課と数える)。国定読本と布会初読本との共通教材は23課であり、巻全体のおよそ5割を占める。これらを除いた22課が国定読本及び布会初読本と共通しない教材である。

この巻で注目されるのは、「モモトラウ」「ハナサカヂヂイ」「ノミノスクネ」「ウラシマノハナシ」といった日

本の昔話が多く採録されていることである。このうち、「モモトラウ」「ノミノスクネ」「ウラシマノハナシ」は、国定読本及び布会初読本とほとんど差異のない内容であるが、「ハナサカヂヂイ」はやや趣が異なる。

国定読本及び布会初読本の「ハナサカヂヂイ」において花を咲かせられなかった欲深の爺は、縄で縛られると語られ、挿絵では帯刀した和装の人物に捕えられる様子が描かれている。ところが、沙港初読本において欲深の爺は、近代日本が欧米から取り入れた制度階級である「ジュンサ」に捕えられると語られ、挿絵では牢に入れられた爺の様子が描かれている。沙港初読本の「ハナサカヂヂイ」には、現地の事情に合わせた変更が施されている。こうした変更は、挿絵(人物や景観など)によくあらわれている。

〈巻3の考察〉

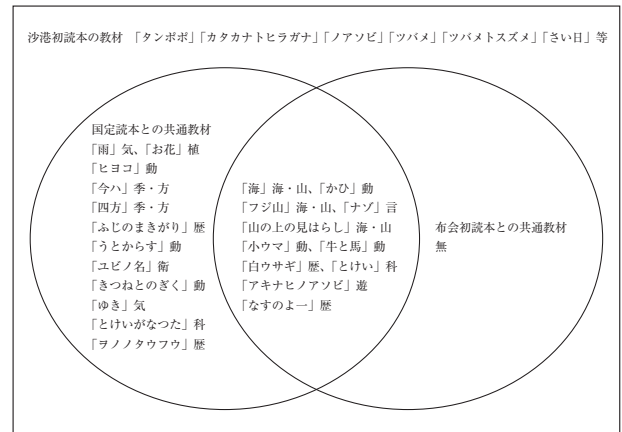


図2

沙港初読本の巻3は45課の教材が採録されている。国定読本と布会初読本との共通教材は23課であり、巻全体のおよそ5割を占める。これらを除いた22課が国定読本及び布会初読本と共通しない教材である。

この巻で注目されるのは、国定読本及び布会初読本との共通教材でない「さい日」である。本課は、前半部分で米国の祭日として独立祭や感謝祭を紹介し、後半部分で日本の祭日として天長節や紀元節を紹介する教材である。「天長せつといふのは、日本の天のうへいかのお生れになつた日です」、「きげんせつはじんむ天のうがおくらみにおつきになりましたおいはひ日です」とそれぞれ紹介されているが、この教材を学ぶことで、在米日系人子

弟は日本語だけでなく尊皇の態度を学ぶことになる。国定読本には「天長節」や「紀元節」という教材が載るが、これらの教材は、国定読本や植民地の「国語」教科書において、幾度も採録される定番の教材であった。皇国史観の教育に通じるこれらの教材は、国民統合の推進を手伝うものであったと考えられる。よって、この「さい日」にも国民教育の側面があるといえる。本課は、「何時の間」にやら国家的精神を涵養」させることにつながったろう。

〈巻4の考察〉

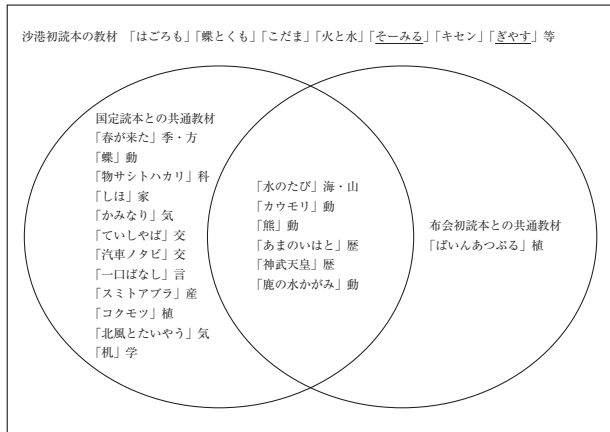


図3

沙港初読本の巻4は44課の教材が採録されている。国定読本と布会初読本との共通教材は19課であり、巻全体のおよそ4割を占める。これらを除いた25課が国定読本及び布会初読本と共通しない教材である。

この巻で注目されるのは、「そーみる」と「ぎやす」である。前者は製材所について説明する教材である。これはシアトルが製材所の町として発展したことをふまえて採録されたものであろう。そういった町の性格を考慮したためか、沙港初読本には産業や商業に関する教材が多い。後者は、ガス会社について紹介する形で石炭ガスのつくり方を説明した教材である。他にも、巻8の「産業と商業との関係」や「商業家の徳義」などが挙げられる。前者は、産業と商業とを鳥の両翼や車の両輪にたとえ、双方の発達が必要であると説く教材、後者は、商業家の徳義として正直・勤勉・儉約などを説示した教材である。こうした産業や商業に関する教材を積極的に多く採録する傾向は、国定読本や布会初読本にはみられない。沙港初読本には、こうしたシアトルの町としての性

格が少なからず反映されている。

〈巻5の考察〉

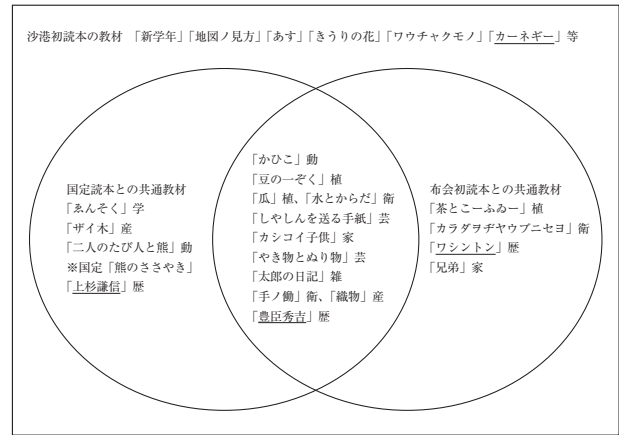


図4

沙港初読本の巻5は43課の教材が採録されている。国定読本と布会初読本との共通教材は19課であり、巻全体のおよそ4割を占める。これらを除いた24課が国定読本及び布会初読本と共通しない教材である。

この巻で注目されるのは、「カーネギー」「ワシントン」「上杉謙信」「豊臣秀吉」といった伝記の形をとる教材が多く採録されていることである。「カーネギー」は、米国で活躍した実業家アンドリュー・カーネギーの少年時代を取り上げた教材で、「ワシントン」は、米国の初代大統領ジョージ・ワシントンの少年時代を取り上げた教材である。米国に縁のある人物を扱ったこの二つと数を合わせるように採録されているのが、日本の武将であるふたりを扱った「上杉謙信」と「豊臣秀吉」である。なかでも、巻の最後に載る「豊臣秀吉」は特筆すべきである。「日本中を平げて、後には朝鮮までも攻めて行つた豊臣秀吉といふ人は、元はいたつて身分のひくい人でございました」とはじまる本課は、秀吉の侵略を「朝鮮せいばつ」と語る。いうまでもなく、征伐ということばには侵略行為を正当化する論理が内包されている。そして、この論理は、巻6の「大日本帝国」に引き継がれる。

〈巻6の考察〉

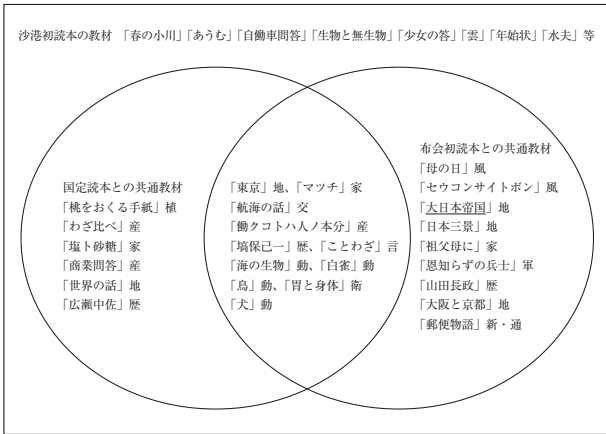


図5

沙港初読本の巻6は36課の教材が採録されている。国定読本と布会初読本との共通教材は26課であり、巻全体のおよそ7割を占める。これらを除いた10課が国定読本及び布会初読本と共通しない教材である。

この巻で注目されるのは、「大日本帝国」である。この教材は、国定読本には採録されず、台湾総督府編纂の第二期「国語」教科書や朝鮮総督府編纂の第一期「国語」教科書など、植民地の「国語」教科書において採録された教材である。冒頭、大日本帝国が東アジアに位置することからはじまり、本州・四国・九州・北海道・千島・琉球に加え、台湾・朝鮮半島・樺太南部が領土であると紹介する。また、後半部分では次のように述べられている。「日本ハ万世一系ノ天皇ガ御治メニナル国デ、又大層古イ国デス。神武天皇ガ御位ニ御ツキニナツテカラ二千五百八十年で、今ノ天皇ハ百二十二代目ノ天皇デス」。この記述は、巻3の「さい日」と同様に、国民教育の側面があるといえる。皇国史観の教育に通じるこの「大日本帝国」が、植民地の「国語」教科書のみならず、移民地であるハワイやシアトルの日本語教科書においても採録されたことは看過できない。

〈巻7の考察〉

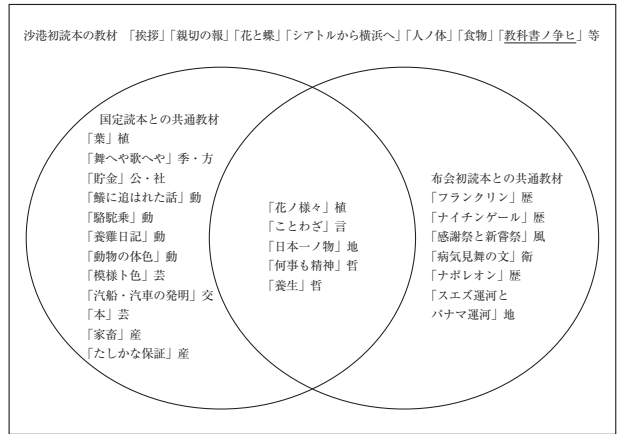


図6

沙港初読本の巻7は36課の教材が採録されている。国定読本と布会初読本との共通教材は23課であり、巻全体のおよそ6割を占める。これらを除いた13課が国定読本及び布会初読本と共通しない教材である。

この巻で注目されるのは、「教科書ノ争ヒ」である。これは、擬人化された歴史・地理・物理・国語の教科書が、どれが最も有用であるか議論する教材である。まず、歴史が「僕ガキナケレバドウシテ昔ノ事ヲ知ルコトガ出来ヤウ」などといって自らが最も役に立つことを訴える。次に、地理が「若シ僕ガキナカッタラ、誰モ世界トイフモノノアルコトモ知ルマイ」と主張し、続けて物理が「僕ガキナカッタラ、林檎ハ天ヘ落チルモノデハナクテ、地上ニ落チルモノデアルトイフ、引力ノ法則ヲ誰ガ知ルドラウ」と主張する。すると最後に国語が次のようにいう。「諸君、議論ハ止メタマヘ。諸君ハ僕ガ一番偉イトフコトヲ知ラナイノカ。文字ガナカッタラ、君等ノ中誰一人トシテ出来ナカッタドラウ。諸君ハ皆白紙ニシテシマフドラウ。諸君ハ僕ノオ蔭ヲ受ケテキル、僕ガキナカッタラ君等ハ零ダ。」そして語り手が「国語ノ意見ヲ聞イテ一同ハ皆頭ヲ下ゲタ」といっておわる。この言説は、「国語」教育が他教科より優位にあるという沙港初読本の見方を物語っている。

〈巻8の考察〉

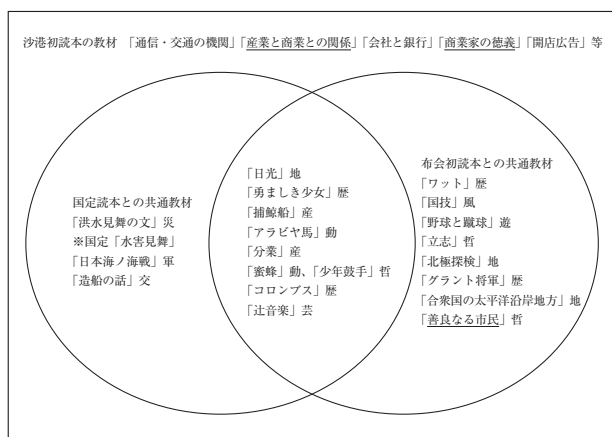


図7

沙港初読本の巻8は38課の教材が採録されている。国定読本と布会初読本との共通教材は20課であり、巻全体のおよそ5割を占める。これらを除いた18課が国定読本及び布会初読本と共通しない教材である。

この巻で注目されるのは、「善良なる市民」である。本課は、次のようにはじまる。

諸氏の父祖は遠く祖国を離れて米国に來れり。諸氏は米国に出生し、米国の公立学校に教育せられて、将来米国市民たるべき特権を有せり。米国民としての権利を有せる諸氏は、飽くまで善良なる市民として世に立たざるべからず。これ諸氏の父祖と、父母の属する日本国とが均しく希望措かざる所なり。

この教材は、シアトルに住む日系人子弟があくまで米国の市民として生きることを推奨している。続けて、米国の進歩と発達のため米国に尽くす覚悟をもった「善良なる市民」であるべきことを謳うが、その後では次のようにもいう。

日本の歴史は日本国民の優良なる特質を示せり。幾多の美しき史上の実話を学び、現今の日本の発達を知る諸氏は、他人種の間立ちて競争するに当りても、優良なる日本国民の子孫たる自信を失ふことあるべからず。日本民族の長所を忘れず、其の美德を保ちて、さすがは日本民族系の米国民なりと、米国各人種の間尊重せられんことを期せよ。是諸氏が米国に尽す所以にして、同時に其の父祖の国に報ふる所以なり。

本課は、在米日系人子弟に対し、米国の市民であるこ

とを自覚しながら、日本国民の子孫であることも忘れてはならないと教える。そして、これは教科書の役割の一つまでも示している。沙港初読本の編纂は、日系人子弟が日本語を学ぶためだけでなく、日本の「美しき史上の実話」を学び、その「発達」を知るためでもあったのである。

沙港初読本は本課が最終巻の末尾であるが、同じくこの教材を載せる布会初読本は最終巻の末尾が国Ⅱ読本にも載る「大国民の品格」である。こうした構成の面からいえば、沙港初読本は布会初読本に比して、より明確にその役割を示している。つまり、沙港初読本は、日本の国民教育の側面を比較的強くもっている布会初読本と比べて、日系人子弟を米国の市民として教育することをより強く念頭においているといえる。

6. 全巻を通じた考察——分野別採録数と植民地教科書からの影響

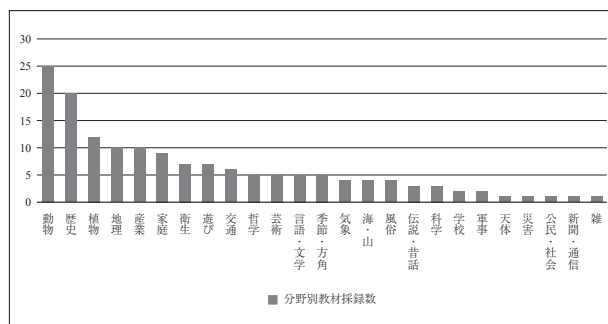


図8 分野別共通教材採録数

上の図は分野別の共通教材採録数である。採録数の上位5種は、動物、歴史、植物、地理、産業である。最も多くみられた動物分野の教材は、植物分野と合わせて、児童が日常生活のなかで見たり触れたりするものである。動物・植物分野の教材は、低学年の教科書に比較的多く採録されているが、これは国定読本と布会初読本のあり方と一致する¹⁹⁾。また一方で、高学年の教科書に比較的多く採録されているのが歴史・地理分野の教材であることも同様のあり方である。これら4種の教材群は、国定読本と布会初読本の性格を引き継ぐ形で共通教材を有していることがわかる。

しかしながら、産業分野の共通教材が多く採録されているのは、国定読本と布会初読本の性格を引き継いだこ

とが要因ではない。国定読本と布会初読本において、産業分野の教材は動物・植物・歴史・地理分野それぞれの採録数に比べれば、その数はきわめて少ない。それにもかかわらず、産業分野の教材が共通教材採録数の上位5種に入るのは、巻4の考察において明らかになったように、沙港初読本が産業や商業に関する教材を積極的に多く採録する傾向をもつからであろう。

ところで、巻7の「教科書ノ争ヒ」でみたように、沙港初読本には、「国語」教育が他教科より優位にあるという見方を示す教材が採録されていた。こうした見方は、植民地の教育において言語教育が重視されていたことに通じる²⁰⁾。植民地の「国語」教育は、言語教育であるとともに、内地と植民地との文化統合をはかるものでもあった²¹⁾。本課が示唆しているのは、現地人子弟に対する植民地教育の性質と、日系人子弟に対する移民地教育の性質とを峻別することが困難なことである。それに関して、以下に示した共通教材のありようは重要な判断材料となる。

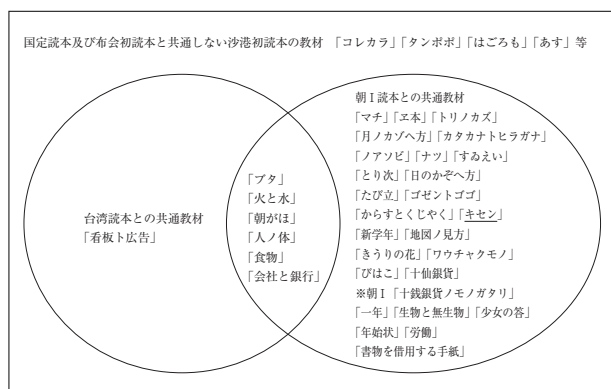


図9

みてわかるように、沙港初読本には、台湾読本と朝 I 読本から転用された教材、あるいはそこから着想を得て作成されたと考えられる教材が採録されている。また、それは朝 I 読本との間でより多く確認することができる。さらに、図に示していないが、布会初読本と共通する教材のなかにもそれはある（巻6「大日本帝国」など）。前節で明らかになった各巻の国定読本及び布会初読本との共通教材の数に比べれば少ないが、沙港初読本は台湾読本及び朝 I 読本とも教材が共通している。そして、やはりそのなかには、現地に合わせて多少の改変が施されているものが少なくない。

たとえば、朝 I 読本の巻4「汽船」が「コレハ釜山ノ港デス。大キナ汽船ガ煙ヲハイテイマス」とはじまって、「此ノ汽船ハ、十時間グライタテバ、下関エ着キマス」とおわるのに対し、沙港初読本の巻4「キセン」は「コレハしあとのノ港デス。大キナ日本ノキセンガ、黒イ煙ヲ出シテキマス」とはじまり、「コノキセンハ十四五日位デ、日本ノ横浜へ着キマス」とおわる。いずれも汽船をめぐる教材であるが、その停泊している港が異なるのである。また、挿絵には、朝 I 読本より沙港初読本に描かれている船のほうが大きいことや、前者の背景が山であるのに対して後者の背景が町であるといった差異がみられる。

内地と植民地とが船で繋がっていることを示す朝 I 読本の「汽船」と、内地と移民地とが船で繋がっていることを示す沙港初読本の「キセン」との間に教材としての本質的な差異はないといえる。これは、前節で取り上げた「大日本帝国」についても同様のことがいえる。沙港初読本の巻6「大日本帝国」と朝 I 読本の巻3「だいつぼんでいこく」とは、本文が多少異なるものの、挿絵がまったく同じであり、明らかに転用されている。このありようは、現地人子弟に対する植民地教育の性質と、日系人子弟に対する移民地教育の性質とを峻別することが困難であることを物語っている。

現在、シアトル日本語学校の収蔵品のなかには、1930（昭和5）年から1932（昭和7）年にかけて発行された朝鮮総督府編纂の第三期「国語」教科書が含まれている²²⁾。沙港初読本は、初版が1920（大正9）年から1921（大正10）年にかけて発行され、再版が1926（大正15）年から1927（昭和2）年にかけて発行されたので、沙港初読本がこの教科書から影響を受けた可能性はない。だが、この収蔵品が示しているのは、戦前に沙港日本国語学校の関係者が植民地で使用された朝鮮総督府編纂の「国語」教科書について関心を寄せていたこと、また、それを参照することのできる状況にあったことである。沙港初読本は、その教科書の内容及び編纂された状況からいって、内地や外地または植民地や移民地といった枠組みにとらわれず、それらを包括する視点をもって研究することが必須であるといえる。このように帝国日本の内地や外地において「国語」体制から「日本語」体制への移行があったかたわらで、移民地においても日本語

を教育する制度があった。それは体制と呼べるほどのものではなかったろうが、そこで児童生徒が学んでいたことは事実である。そして、沙港初読本は、そこで使用された教科書が内地はもちろん外地の教科書とも密接な結び付きをもっていたことを明かしている。

7. 結語

はじめに述べたように、沙港初読本が編纂された1920年頃のシアトルというのは、日系人に対する風当たりが厳しくなる排日運動の流れのなかにあった。後に、日本へ帰国するか米国に永住するか迫られることになる親たちは、自分たちがどちらの選択をとったとしても、子どもが困らないように生きていけることを望んでいたはずである。また、そういった要望は、日本語学校の教育に対しても向けられていたに違いない。すなわち、日本語学校に求められていたのは、日本に帰国しても、また米国に永住しても、無事に生活をおくることのできる能力を子どもに授けることであつたらう。そして、その能力とは、言語に限られたものではない。

本稿の考察から明らかになったように、沙港初読本は、布会初読本と比べて、日系人子弟を米国の市民として教育することをより強く念頭において編纂されたものと考えられるが、一方ではそこに日本の国民教育の側面も確かに存在し、加えて植民地教育の性質とは容易に峻別することのできない移民地教育の性質もまた内包されている。

沙港初読本は、巻1に載る米国旗の挿絵が示すように、日本の国民教育に対する傾注の度合いが、内地で使用された国定読本やハワイで使用された布会初読本に比べ小さい。だが、それは布会初読本にみえる、日本の国民教育と米国の市民教育への志向性のせめぎ合いが、沙港初読本にまったくなかったことを意味してはいない。欧米文化をもつ現地の事情に合わせた改変が施されたり、貿易により発展した町の性格が色濃く反映されたりしているものの、その一方では、侵略者を正当化する論理が内包されている教材を採録したり、皇国史観の教育に通じる教材が採録されたりしている。「何時の間にやら国家的精神を涵養」させる教材が採録されているのである。

本稿では、沙港初読本を国定読本及び布会初読本と比較する際に共通教材を考察の対象としたが、非共通教材すなわち転用されなかった教材についても考察する必要がある。また今回は十分に論じきれなかったが、植民地の「国語」教科書との影響関係についても詳細に検討しなければならない。それによって、沙港初読本の性格は、より浮き彫りとなるだろう。

注

- 1) 米国西北部聯絡日本人会編『米国西北部在留日本人発展略史』(米国西北部聯絡日本人会、1923年) p.39の統計表を参照した。
- 2) 森本豊富「エスニックコミュニティ母語学校としての日本語学校——カンプトン両学園を例に」(吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』日本図書センター、2005年、pp.97-98)。
- 3) エドワード・マック (Edward Mack) 編『シアトル版日本語読本：別冊解題』文生書院、2012年、p.14(奥泉栄三郎監修『初期在北米日本人の記録：第4期別輯』文生書院)。
- 4) 安田敏朗『脱「日本語」への視座』三元社、2003年、p.116。
- 5) 主なものとしては他に、宮脇弘幸研究代表『日本植民地・占領地の教科書に関する総合的比較研究—国定教科書との異同の観点を中心に—』(文部科学省科学研究費補助金成果報告書、2006-2007年)が挙げられる。
- 6) 竹内幸次郎『米国西北部 日本移民史』大北日報社、1929年、pp.415-416(復刻版、雄松堂出版、1994年)。
- 7) マック前掲書、p.31。
- 8) 竹内前掲書、p.418。
- 9) 竹内前掲書、pp.424-425。
- 10) 竹内前掲書、p.429。
- 11) 竹内前掲書、p.431。
- 12) 竹内前掲書、p.432。
- 13) 引用文の旧字は原則として新字に改めた。
- 14) 海後宗臣等編『日本教科書大系 近代編』(講談社、1961-1967年)所収教科書を参照した。

- 15) 布哇教育会初の日本語教科書はこれまで未発見の資料とされてきたが、調査の結果、山口県立山口図書館に巻1の原本が、さらに日本ハワイ移民資料館に巻1・巻3・巻4・巻5・巻6の目次と部分的な写しが所蔵されていることがわかった。また、巻2については布哇教育会編集部編著『布哇日本語教育史』布哇教育会、1937年（奥泉栄三郎監修『初期在北米日本人の記録』文生書院）のなかでその編纂趣意と教材配当が示されている。本稿ではそれらを参照した。
- 16) 国立中央図書館台湾分館蔵本の復刻版『日治時期臺灣公學校與國民學校國語讀本』（南天書局、2003年）、福岡教育大学附属図書館蔵本の復刻版『普通学校国語讀本』（粒粒社、2003年）を参照した。
- 17) 奉天外国語学校の『日本語讀本』は、ほとんどの教材を朝鮮総督府編纂の第一期「国語」教科書から転用している。
- 18) 教材分類は、国立教育研究所附属教育図書館編『国定教科書内容索引 尋常科修身・国語・唱歌篇』（広池学園出版部、1966年）を参考に行った。
- 19) 布哇教育会編集部編著『布哇日本語教育史』（布哇教育会、1937年）の編纂趣意書には、「初メハ主トシテ児童ノ日常目撃スル事物ニ就キテ記述」（p.78）することが示されている。
- 20) 小熊英二は『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社、1995年）のなかで北海道の先住民族であるアイヌの人々に対する教育をめぐる次のように述べている。「無色透明の近代化というものには存在しない。教育は特定の言語で行なわれ、職業訓練も特定の文化をもった社会のなかで生きることを前提としている。当時（引用者注：19世紀末）のアメリカ社会で先住民族を生きてゆかせることを前提に教育をするなら、英語を教え頭髪を刈り、キリスト教に改宗させるのが早道であったろう。日本で同じことを行なうとすれば、やはり日本語と農耕を教え、天皇への忠誠を含む日本臣民としての道徳を教えることだった。（p.83）」「近代化」が目指された植民地では、現地に住む先住民族に対し、特定の言語すなわち侵略者側の言語で教育が行われた。それを教える教科書には侵略者側の文化・習慣・信仰などにまつわる教材が多く採録される。それが文化統合をはかる植民地の「国語」教科書である。
- 21) 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996年）。
- 22) マック前掲書、p.20。

A study on the first Japanese textbook used in elementary class of the Japanese Language School in Seattle

Ryosuke FUNAKOSHI*

Recently, there has been an increase in research related to Japanese textbooks which were used before and during the World War II. It is quite obvious to carry out the studies on “National Language (i.e. kokugo) textbooks that are used in Japan”, and the research pertaining to “Japanese Language textbooks used in Japan’s former overseas territories” has also been given due importance. The previous comparative studies of “National Language textbooks and Japanese Language textbooks” were confined only to take up the problems related to textbooks being used in Japan and overseas territories. Consequently, those studies were also limited only to these two types of textbooks from the viewpoint as well as the perspective of research. Therefore, as far as textbooks of “National Language” and “Japanese Language” used before and during the Second World War are concerned, prior research has not yet been carried out from a broader and comprehensive point of view that could undertake the problems of textbooks meant for immigrants.

This study attempted to gain insights into the diversion of teaching materials and the feature of the first Japanese textbook used in elementary class of the Japanese Language School in Seattle. It is considered that this Japanese textbook which was used in Seattle was edited with a clear objective to educate Japanese students in an American way as compared to the first Japanese textbook used in Japanese Language

School of Hawaii. On the contrary, it is understood that the Japanese textbook used in Seattle connotes that some aspects of Japanese National Education certainly exist over there, and in addition to that, it is difficult to clearly differentiate between the characteristics of immigrant and colonial education.

The first Japanese textbook used in Seattle comprises of the study materials such as the materials diverted from National Language textbooks and Hawaii’s Japanese Language textbook; or the materials taking their inspiration from the above-mentioned textbooks; that cover almost more than half of all the chapters in this book. Furthermore, this Japanese textbook of Seattle also diverted the teaching materials from the “Japanese Language textbooks” used in the then colonies such as Taiwan and Korea. Thus this study has led to the conclusion that the Japanese textbook used for immigrants has its close relationship with not only the “National Language textbooks” used in Japan, but also with the “Japanese Language textbooks” used in the colonies.

Key words

Japanese Language, National Language, immigrant, colonial

*Division of Language and Culture Education, United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

沙港日本国語学校初の 初等科用日本語教科書に関する一考察

船 越 亮 佑*

近年、戦前・戦中の国語及び日本語教科書に関する研究が盛んに行われている。そこでは、内地で使用された国語教科書はもちろん、外地で使用された「国語」教科書についても検討されている。従来の国語及び日本語教科書の比較研究では、内地と外地の教科書が取り上げられるにとどまり、研究の視角及び視座がその二項に限定されていた。したがって、戦前・戦中の国語及び日本語教科書について、より広くすなわち移民地の教科書を含めた包括的な視点をもって研究することは行われていない。

本研究は、戦前に米国のシアトルで使用された沙港日本国語学校初の初等科用日本語教科書について、採録教材の転用のありようと教科書の性格を明らかにしたものである。このシアトルの日本語教科書は、米国のハワイで使用された布哇教育会初の尋常科用日本語教科書と比べて、日系人子弟を米国の市民として教育することをより強く念頭において編纂されたものと考えられるが、一方ではそこに日本の国民教育の側面も確かに存在し、加えて

植民地教育の性質とは容易に峻別することのできない移民地教育の性質もまた内包されていることがわかった。

このシアトルの日本語教科書は、国定国語教科書とハワイの日本語教科書から転用された教材、あるいはそこから着想を得て作成されたと考えられる教材が全課の半数以上を占め、さらに台湾や朝鮮といった植民地で使用された「国語」教科書からも教材を転用していた。そして、本研究は、この移民地の日本語教科書が、内地の国語教科書だけでなく植民地の「国語」教科書とも密接な結び付きをもつという結論にいたった。

Key words

日本語, 国語, 移民, 植民

*東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 言語文化系教育講座